

最新インバウンド状況と今後の課題



花巻温泉株式会社 代表取締役社長

安藤 昭

ANDO Akira

プロフィール

学歴	昭和57年3月	千葉商科大学商経学部卒業
職歴	昭和57年3月24日	富士屋ホテル株式会社 入社
	平成 2年1月10日	シェラトンホテルズにてマネージメント研修（ハワイ1年間）
	平成17年6月28日	富士屋ホテル株式会社 取締役
	平成19年6月27日	富士屋ホテル株式会社 取締役総支配人
	平成22年6月25日	富士屋ホテル株式会社 第11代 代表取締役社長
	平成26年3月 1日	花巻温泉株式会社 第14代 代表取締役社長 現在に至る

日本国内 2400 万人、東北 19 万人

2008年に観光庁が発足し、その前年の訪日外国人客数は834万人でありました。

長らく、海外旅行者数と訪日外国人旅行者数は大きくかけ離れていましたが、観光庁の発足と小泉政権下における、ビジットジャパンキャンペーンにおいて1000万人を目指すという数値目標が提示されました。2011年は東日本大震災によって、その年は621万人に落ち込むものの、翌年の2012年には835万人となり、2013年には大台の1036万人となりました。その後の伸びは、言うまでもなく2016年には2403万人となり、2020年の東京オリンピック・パラリンピック時には4000万人、更に6000万人という目標が掲げられています。日本は今後、人口減少という大きな問題に直面しており、国内総生産の点から見ても、政府の施策として避けて通れないと思います。日本人一人当たりの消費額が年間130万円～140万円と言われておりますが、外国人の日本滞在時の消費額平均が14万円とすれば、9人の外国旅行数で日本人1人の消費額と同等となります。つまり、2400万人は日本人266万人に相当することになります。

さて、そのような中、私の勤務する東北地方は6県ございますが、6県で2016年の外国人旅行者数は19万人となっています。日本全体から見ればわずか0.8%となっています。6年前の東日本大震災時は、インフ

ラや宿泊施設が影響を受けてそれどころではないという時期もございましたが、今はそういった事は全くなく本当に寂しい限りでございます。国や6県の行政、民間会社も努力をしていますが、風評被害等により大苦戦を強いられております。岩手県の2016年の宿泊者数は115,580人となっています。その内、花巻温泉株式会社は、22,000人です。約2割が当社となっています。

簡単に岩手県の外国人宿泊客数について列記致しますと、震災前の平成22年は83,440人だったものが、2011年の震災年には32,140人まで落ち込み、その後年々右肩上がりとなっています。一番多い国は、台湾で61,560人、次が中国で12,110人、香港が8,290人、韓国が6,220人、その他はタイ、マレーシア、シンガポールなどが続きます。インバウンドにおいて、どの空港を利用するかが大きなポイントとなってまいりますが、定期便を持たない岩手県においては、季節のチャーター便、東北の玄関口である仙台空港、周辺の青森空港、秋田空港、路線の多い成田空港や羽田空港から新幹線やバスを利用しての来県となります。そうなりますと、空港からの2次交通の確保が重要となってまいります。岩手県においてもFIT（個人型）の外国旅行者が増えてきていますが、まだまだ圧倒的に多いのは団体（バス1台で20名から30名）であります。当社でも多い日はバス10台という事も多くなってまいりました。

岩手県チャーター便の歴史

私は現在、岩手県花巻空港国際定期便歓迎実行委員会の会長を仰せつかっております。岩手県においてただ一つの空港が花巻空港でございます。国内線は、新千歳に毎日3便、小牧空港に毎日4便、伊丹空港に毎日4便、福岡空港に毎日1便となっております。前述の通り、国際定期便の運航は現在ありません。2年前に台湾からの定期便受入れの協議もされましたが、まだ実行はされておられません。現在、力を入れている事はアジア地域からのチャーター便の受け入れ、そして双方向からの定期チャーター便の運航再開であります。チャーター便が初めて実行されましたのは、17年前の2000年に遡ります。台湾からの28便で、6,003名からのスタートとなりました。その当時を知る現在花巻温泉株式会社の佐藤セールス部長は、「初便が到着した当時の空港は、トイレが全て和式で台湾からのお客様が困ったとか、空港の売店での買い物の時に、クレジットカードが使用出来なかったなど、今思い起こせば笑い話のような出来事がありました」と話しています。現在では、大型の機材が離発着出来る2500メートルの滑走路となり、国際線専用チェックインカウンターから専用ロビー、入出国ゲートなどを完備した国際空港に生まれ変わりました。近年の岩手県の動きとしては、定期便化に向けての取り組みを強化致しておりますが、中々進んでいないのが現状であります。航空会社の諸事情やアウトバウンドとしての見込が計算出来るかが一番大きなポイントかと思えます。現在、仙台空港には台湾のエバー航空が週4便、中華航空の関連会社でLCCのタイガーエアが週4便飛んでおります。北東北の岩手県として、いずれの国との定期便化に向けて最善の努力を継続してまいりたいと思えます。そのような事から、チャーター便の受け入れ実績を残して、定期便化に向かっている所でございます。

訪台・訪港に際して

2017年、5月末から6月初旬にかけて、岩手県台湾訪問ミッション並びに香港訪問に参加してまいりました。台湾は前述の通り、東北6県の中で台湾からの観

光客数は岩手県がトップであります。これは、台湾総統府の民政長官を務めた後藤新平(岩手県奥州市出身)や日本円札にも登場した新渡戸稲造氏(岩手県盛岡市出身)が台湾総督府の技師に任命され、台湾における糖業発展の基礎を築いた功績などによるものもあり、特別な関係が双方に長年に渡って引き継がれている事も要因であると考えます。

今回の訪台を含めて、県知事ミッションは毎年数回行われており、民間レベルや岩手県の担当レベルでは年に数回又は数十回と行われている大手航空会社並びに大手旅行会社への訪問であります。今回のミッションは、岩手県知事を団長とし、岩手県観光協会会長、岩手県企画理事、岩手県商工労働観光部長、花巻市長、民間企業の社長など、30名からなる訪問でありました。

まず、台湾の状況でございますが、桃園国際空港に3本目の滑走路工事(2020年~2023年)が行われていることもあり、今後も拡大が見込まれる市場であると思われれます。台湾の人口は、2351万人。政治体制は、民主進歩党に変わり蔡英文氏が総統を務めています。議会は一院制で、立法院定数は113であります。お忙しい中、日本では議長にあたる蘇院長にお会いすることが出来ました。日本から台湾を訪れる数は約190万人、台湾から日本に見える方は417万人(前年比13.3%)となっており、相互交流は600万人を突破し、過去最高を更新しています。訪日台湾人の特徴としては、1人当たりの旅行消費が125,854円(16年)、平均泊数は7.4泊(16年)となっています。その内、8割がリピーター、6割が女性であります。団体旅行と個人旅行の割合は、団体が3割、個人が7割とWEBを通しての申し込みであるFITの比率が高くなっています。日本への地域別訪問率では、関東の32.4%を筆頭に、近畿の31.5%、北海道の13.1%、沖縄の11.3%に対して東北は3.0%と苦戦しています。花巻空港に定期便をとという要望を引き続き行っていますが、今回の訪台では良い結果は得られませんでした。

一方、香港マーケットですが、2年前の当社創業88周年の記念祝賀パーティーの際に、香港や台湾からいつもお世話になっています大手旅行エージェントの方々にお越し頂きました。

香港の旅行会社で一番大きい EGL 社の袁社長がお越しになる予定でしたが、急遽代理でお越し頂いた方が、末廣部長でした。その際に、EGL の袁社長が日本各地の観光親善大使に任命されているという話と、観光大使に任命された地方都市においても、香港との定期便化が実行された、もしくはチャーター便の運航に繋がったというお話を頂きました。私は、早速この話を岩手県の空港課と観光課にお伝え致しました。岩手県としても、初めての事ではありましたが、検討して頂き、数ヶ月であつという間に観光大使任命となりました。達増岩手県知事から任命書や記念のマントを直接プレゼントして頂き、その会食会には、岩手県の観光関係の方々や近隣首長が出席されて華やかな席となりました。

そのようなご縁で香港から花巻空港への定期便化に向けたお願いという事が今回の一番の目的でありました。

6月2日に、ごく限られたメンバーで香港を訪れ、香港航空、日本国総領事館、EGL ツアーズなどを訪問致しました。定期便については、かなり前進した回答であり、東北初の香港との直行便化に向けて実りある訪問となりました。簡単に香港の事情について触れてみたいと思います。まず、一国二制度を掲げていますが、2047年までは、不変的な高度な自治が約束されており、司法権も独立されていることが大きいと思います。人口は約730万人、面積は東京都の半分、1人当たりのGNPはシンガポールに次いでアジア2位であります。香港を訪れる外国人者数は、年間5600万人（日本の2.3倍）、金融・物流・情報においても、アジアの中心的存在であり、地理的に広東省やマカオとの繋がりを見れば人口は1億人に匹敵するものと思われれます。小さな政府であり、軽い税負担（法人税16.5%、キャピタルゲイン課税・消費税・贈与税・相続税・関税）はありません。そのような点から、香港に進出する企業数の国別では、日本が1位となっています。2016年に香港から日本への旅行者数は、183万人（前年比20.7%増）となっており、毎年右肩上がりの状況が続いています。2017年の速報においても、1月から4月で既に70万人を超えており、2013年の1年間に匹敵する数になっています。香港人旅行者の5

人に1人はこれまでに日本に10回以上の訪問があり、高いリピーター率であります。現在の定期直行便は日本の15都市であります。空白地帯の東北に何としても就航を実現したいと思っています。現在、マカオへの橋の建設工事が行われており、年度内にはわずか30分で道路が繋がることとなります。更に、香港の北に位置する深圳までの新幹線工事も行われております。将来的には、広州、上海まで延伸されるということです。著しい発展が見込まれます。2023年には、世界一過密ダイヤといわれる空の玄関口解消の為、3本目の滑走路工事も進行中であります。今回の訪港で感じた事は、香港は、日本の地方にとって最も重要なパートナーであるという事です。

花巻温泉株式会社の取り組み

当社のインバウンドの歴史は、中国大連から雑技団誘致に遡ると思います。客室数が当時は600室、収容人員2500名のホテルでございましたので、冬季の閑散期対策として興業を行っておりました。そのような関係で、早くからインバウンドを受け入れる土壌は備えており、台湾、香港、韓国等へ波及してまいりました。花巻空港から10分という恵まれた立地条件もあり、温泉豊富で、岩手の観光を巡るにしても中央に位置する当社ならではの強みもあったと思います。震災前の2010年のインバウンド人員は、18,081名となっています。その内、台湾からは11,127名（61.5%）、次いで香港からの3,008名（16.6%）、3番目が韓国で1,889名（10.4%）となっています。そして、6年後（2016年）のインバウンド人員は、22,125名となっています。

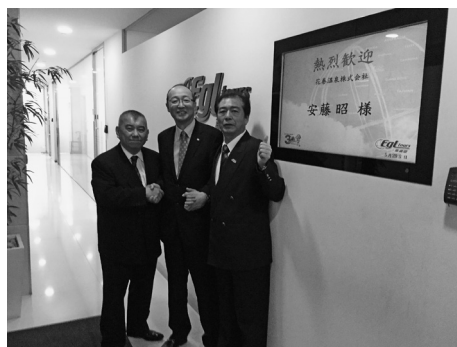
台湾からは、18,522名（83.7%）、次いで、香港が935名（4.2%）、3番目が中国で920名（4.1%）となっており、震災後の韓国は475名となり、香港も2,073名減という状況です。当社としては、FITの受け入れ体制も整えつつ、ツアーの強化も行っております。今年の5月からマンパワーの強化にも取り組んでおります。手始めに、台湾のスタッフを採用し、夏と冬には台湾の大学生をインターンシップとして受け入れる事になりました。又、通年を通して、台湾の大学を卒業し、観光に興味のある学生を数名受け入れる事とし

ています。更に、台湾だけでなくアジア圏や欧米の方もスタッフとして受け入れる内部環境を固めてまいりたいと思っています。

東北地方における課題

前述の通り、1県単位での誘客には無理があります。実際のところ、北東北3県を巡ったり、仙台空港からお客様が岩手まで見えて青森空港や秋田空港から帰国されるケースも多くなっております。又、逆コースもございます。従いまして、東北観光推進機構や東北6

県の行政がひとつになって取り組むことが更に強く求められると思っています。東北6県の述べ連泊数は56万人泊と言われておりますが、3年後には150万人泊まで目指そうと取り組んでおります。特に、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催前・開催期間中は首都圏ではホテル不足が更に強まって行くと言う予想がされています。民泊という事が話題になっていますが、東京駅から盛岡駅まで、新幹線で2時間10分、東京駅から仙台駅まで1時間30分でございます。交通手段の進歩によって、身近な東北を是非ご利用して頂きたいと思っています。



香港 EGL 社訪問



台湾立法院蘇院長と



タイ歓迎



台湾歓迎レセプション



松田大使と香港にて